

奥秩父突出岬の森林環境と鳥類群集（1989年～の変化）

調査開始時の想定：植生遷移にともなうギャップ種の増減、季節移動の年変動、スズタケ一斉開花枯死・堅果等結実動態への反応、森林害虫の影響と気温の関係など

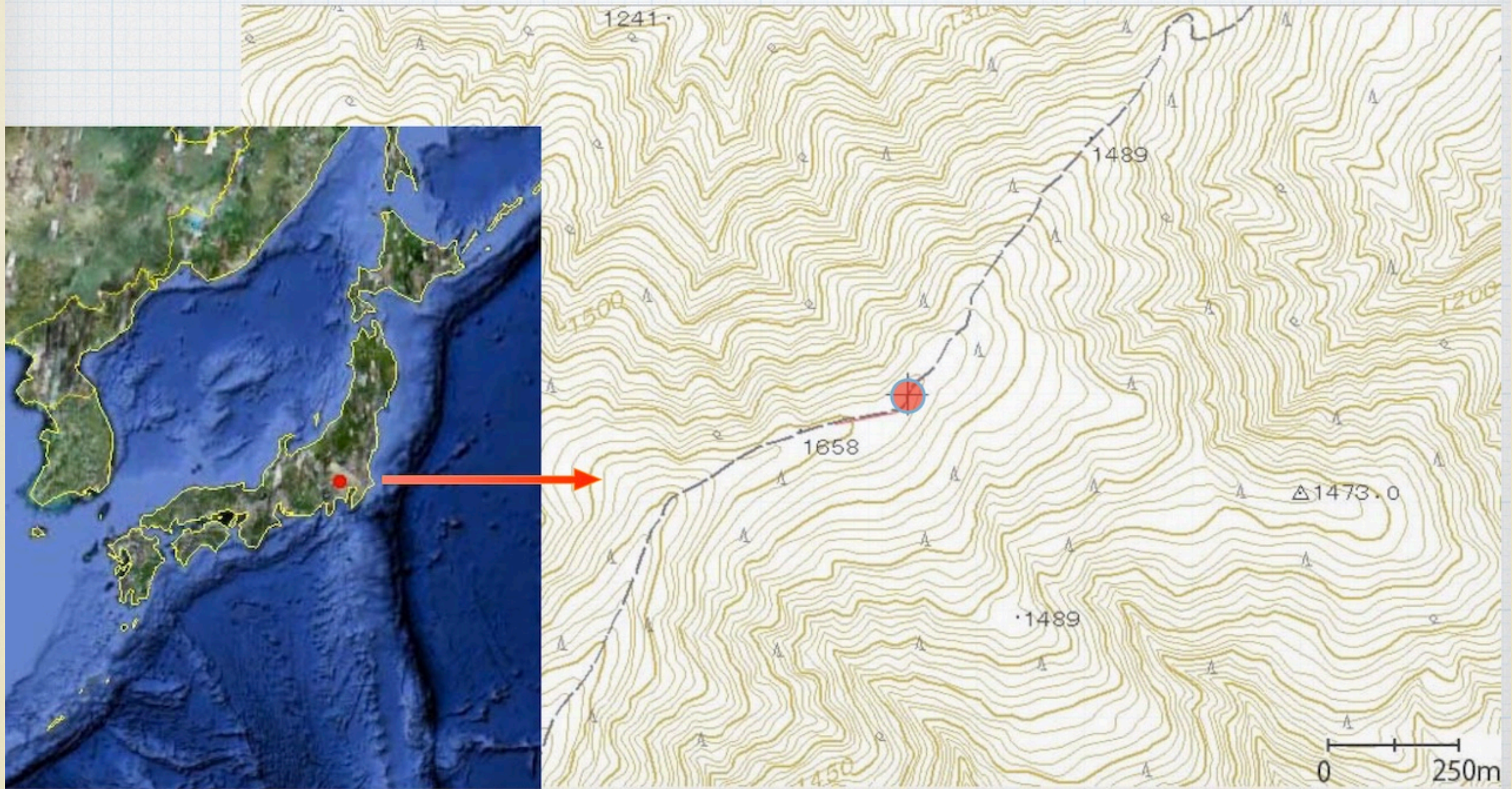
2010年頃まで林床はスズタケ
が密生していた



突出峠（つんだしとうげ） 雁坂道 途中

標高1650m 付近

35° 55' 17.6" N / 138° 48' 30.8" E (世界測地系84)

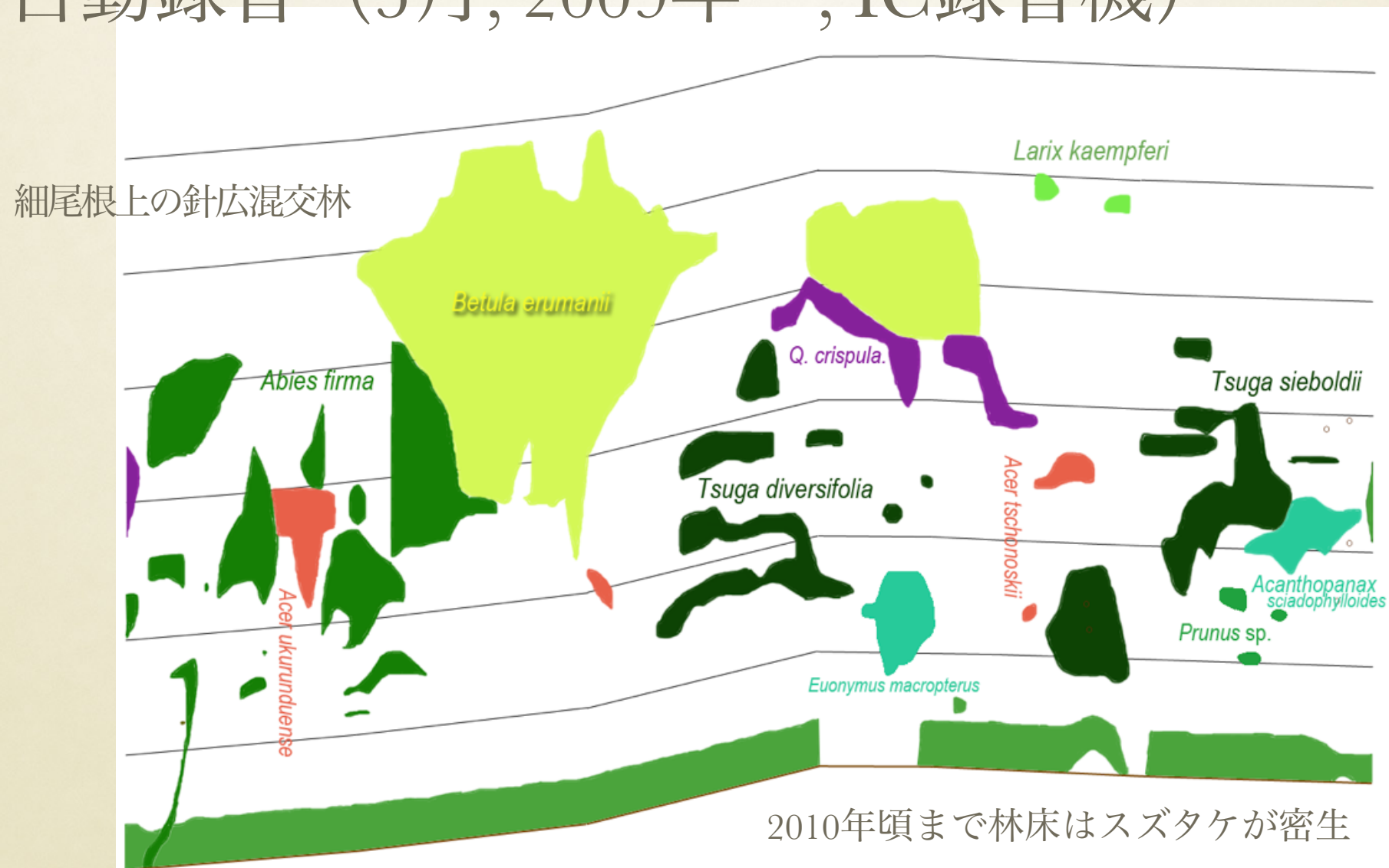


細尾根上の混交林, 2010年頃まで林床はスズタケが密生していた

調査方法1：かすみ網による標識調査（環境庁・省）

網10枚（網目サイズ30 / 36 mm混合、12m）、午前中に6時間以上：
4月(201～5月)～10月(同9月, 12月までの年もあった)に1回ずつ

調査方法2：任意観察（毎標識調査時）と 自動録音（5月, 2009年～, IC録音機）



199#年に実施した植生断面図調査による 森林植生の模式図（原図、石田ら）

1889年～2022年の 突出峠の環境変化

- ・ 気温の上昇（温暖化）
- ・ シカによって林床のスズタケが食べられほぼ消滅
2007年ごろから稈高が低下し笹の葉が減り
2014年ごろには枯れ稈が目立つようになった
2020年ごろには地上に地下茎や根が露出し
土壌浸食も進み始めている（石田 2019）
- ・ シカの樹皮剥によってウラジロモミ林冠木枯損倒伏
- ・ 樹冠木の老熟による枝折れ、枯損倒伏、ギャップ形成
- ・ 外来種（ソウシチョウ）が一時生息

1889年～2022年の 突出峠の環境変化



- 2005年8月13日の突出峠の風景（学生実習）
ヘルメットを被った学生の身長が175cmぐらい、石に乗って、厚底の登山靴をはいている。笹の丈が2m程度あった。

1889年～2022年の 突出峠の環境変化



- ・ 2022年5月26日の突出峠の風景（標識調査）

ギャップ脇の日当たりにはわずかにスズタケの葉が地上近くにあるほかは
枯れた稈もほとんど折れ落ちて見晴らしがよくなっている

結果：

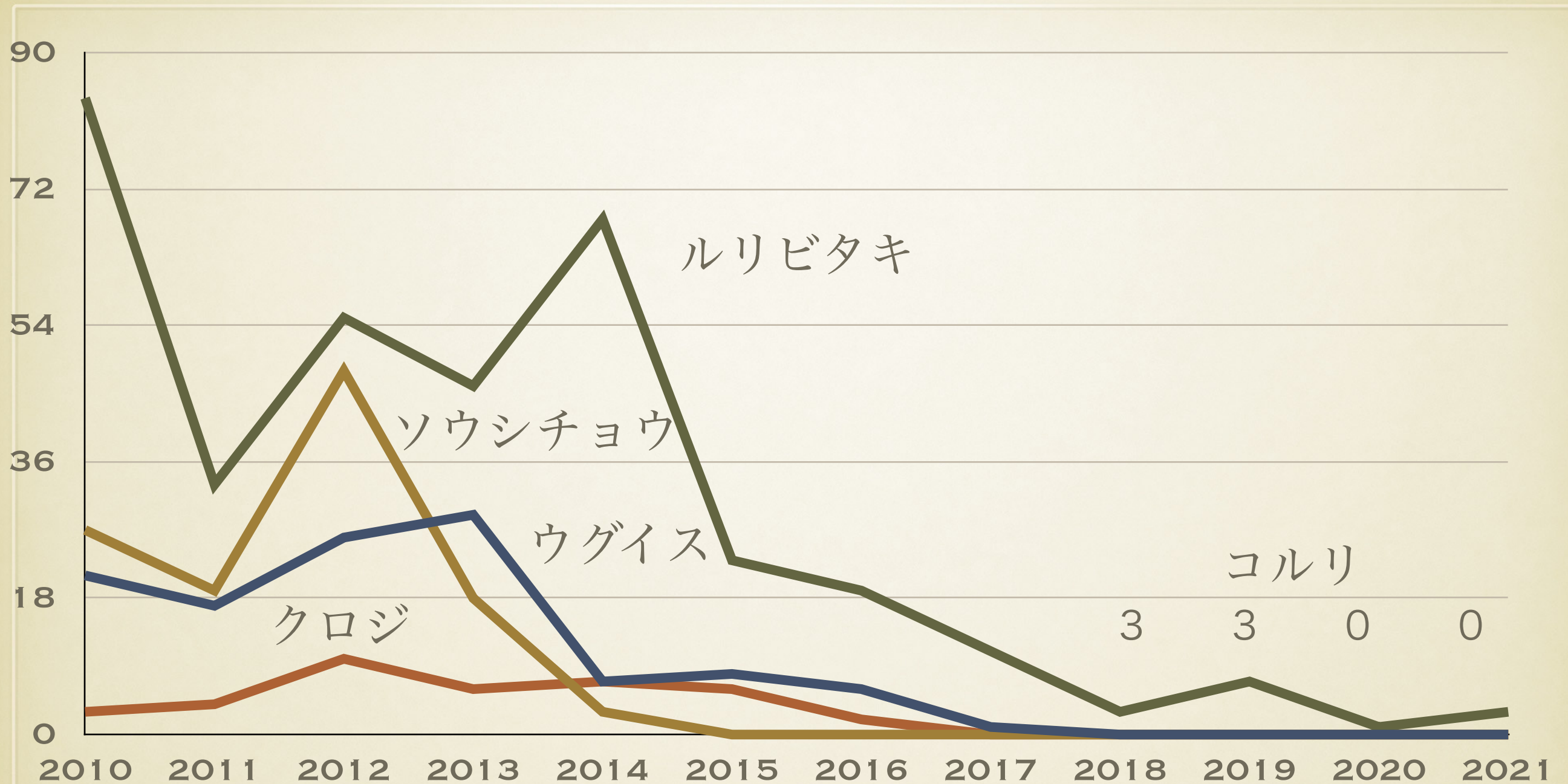
標識調査で30種を捕獲、それ以外に19種を観察した。
標識個体数の多かったのは ウグイス、ルリビタキ、ソウシチョウ、ミソサザイ、コルリ、ヒガラ・・・

ウグイスは、突出岬で繁殖し冬は低地へ移動する。もっとも多かった2009年には44個体捕獲された。2013年に個体数減少が明らかになり、2014年にさらに減り、2015年は5月にオスが1個体のみ、2016年～は捕獲がない。

ルリビタキは、突出岬より高標高で繁殖し春・秋に一時滞在する。秋は若鳥が多い。もっとも多かった2009年には98個体捕獲された。その後増減を繰り返しながら減り、2016年以降は10～15個体程度が捕獲されている。

コルリは、2019年までいた

クロジ、コルリ、ウグイス、ソウシチョウがいなくなり
キビタキ、アカハラがいるようになった



捕獲個体数の多かった4種の7年間の捕獲総数の変化

結果：付随して観察されたこと

鳥類の他に エゾハルゼミが鳴くようになり、同じ尾根の標高1800m程度まで分布して脱皮殻が観察される。

考察：

- ・調査開始時に想定していたスズタケの一斉開花枯死の代りにシカの過食による林床植生の激変（ほぼ消滅）が起こり、林床種がいなくなった。
- ・シカ剥皮によりウラジロモミ、老熟によりダケカンバ、カラマツ等が枯死、倒壊し、多くのギャップが発生して林床が明るくなった。
- ・温暖化の影響で、より低標高に生息していたキビタキとアカハラが観察されるようになった。エゾハルゼミも生息し始めた。
- ・今後、開けた環境を好むパイオニア的な種の出現、増加が観察される可能性がある
- ・森林、動物個体群・群集は 動的である
- ・高標高地では温暖化の影響が1地点で顕著に確認できる

録音で聞いてみて林床種がいなくなったことを実感：

用意する予定の録音：

2009年5月9日 4:00 ～ 7:00

2014年5月22日 4:00 ～ 6:30

2021年5月22日 4:30 ～ 6:30

2022年5月20日 4:30 ～ 7:00

など・・・リクエストあればほか